

# 書作品を見る観点

## —日本人学生と中国人留学生へのアンケート調査から—

林 朝 子

### The Viewpoints of Seeing the Works of Calligraphy: Based on the Questionnaire Survey Targeting Japanese Students and Chinese Students

Asako HAYASHI

#### 要 旨

日本人学生と中国人留学生を対象に書作品の鑑賞を通して書を見る観点を調査した。その結果、以下の4点が明らかになった。1) 「日本の書」と見る観点は、日本人学生の場合「やわらかさ」「流れ」であるが、中国人留学生の場合には更に「のびやかさ」が加わる。2) 日本人学生と中国人留学生共に、文字の判読ができるかどうかの観点から書を見ることが始まる。3) 日本人学生の場合は、読める・読めないに関係なく作品を見るのが可能である。4) 中国人留学生の場合は、読める場合には整った書を好む傾向があり、読めない場合の絵的な要素を含む文字の場合には、書として捉えにくい傾向がある。

#### 1. はじめに

筆者が担当している書道関連授業<sup>1)</sup>では、日本人学生と中国人留学生が共に学ぶことがある。実技では、漢字を中心に古典臨書や創作に取り組んでいるが、日本人学生と中国人留学生の作品から受ける印象は同じではない。書経験の有無や運筆用筆への慣れといった技術的な面に影響されるのではなく、同じ古典の文字を同じ書体で書いた場合でも、自由に創作に取り組んだ場合でも、日本人学生と中国人留学生には何らかの書風の違いが感じられる。日本人学生より、中国人留学生のほうが、文字や全体の構成へのこだわりが強いような印象を受けた。

その違いはどこから来るものなのか、その違いを感じる背景にあるものは何か、ということを探る一方法として、書作品を見る観点の比較を試みた。同じ書の鑑賞を通し、書を見る観点に着目し、作品への嗜好性や両学生の書の捉え方の共通点と相違点を見ていくこととする。

#### 2. 書のあり方と鑑賞について

まず、書のあり方について触れておきたい。書の始まりは、音声ことばによる伝達や記録が時間的空間的に限定されるものであることから、ことばを残すために記号である文字が作られ、それが動物の骨や石に刻まれ、視覚化されたことからである。つまり「歴史的にみれば、言葉の内容と書かれ方の双方によって成立し存続してきたのが書という分野」<sup>2)</sup>であることから、書は「用美一体」<sup>3)</sup>とされている。このような書の歴史的成立過程に基づき、上條(1995)では「書とは文字を素材としてこれを視覚化したものである」<sup>4)</sup>と定義しており、本稿でも書のあり方はこの定義に従うものとする。

一方で、戦後に入り、西洋芸術の思想に基づき、文字にとらわれない前衛派などの新たな試みが始まり、「墨象のようにときに文字を媒体とせず、書造的造形をしようという新しい分野」<sup>5)</sup>が開拓された。しかし、書を前

述のように定義する立場から、本稿では前衛派とされる作品を鑑賞の対象として取り上げることはしなかった。

次に、書の鑑賞について見ていく。まず、「鑑賞」という語についてであるが、その解釈については様々な考え方があり、概念が一定しているわけではない。本稿では、藤森（2014）にならい、鑑賞は「視覚的に対象を捉え、その美を味わうこと」<sup>6)</sup>とする。

書の鑑賞に関しても、一つに総括できるものではない。大きく、西洋の芸術理論に基づく鑑賞と東洋の伝統的な芸術理論に基づく鑑賞の二つに分けられる。藤森（2014）では、それぞれを以下のように述べている<sup>7)</sup>。

西洋の芸術理論に基づく鑑賞：

書の造形性を主として、その美を直観的に味わうことが目的であり、知的要素は純粋な鑑賞を妨げるものとして、明確に区別する。

東洋の伝統的な芸術理論に基づく鑑賞：

造形性を主体としながらも、それに偏ることなく、文学性をはじめとする様々な書の構成要素も含めたものであり、知的理解や価値判断は鑑賞と不可分である。

このように、書の鑑賞は、大きく二つに分けて考えられるが、双方に共通しているのは、視覚的な面での「造形性」であり、本稿でもこの点を中心とし、鑑賞を位置付けたい。本稿で鑑賞を行ったのは、日本人学生と中国人留学生であり、書の経験にも差があり、書の鑑賞については経験がないに等しく、鑑賞する際には、まず「造形性」から入り、次に「造形性」を支える書の構成要素へと進むと考えられるからである。

### 3. 書作品鑑賞とアンケート実施の概要

#### 3-1. アンケート実施の概要

アンケートの実施は、2015（平成 27）年 4 月、日本人学生 47 名、中国人留学生 20 名を対象に行った。

書作品の提示は、サイズを縮小し、カラー印刷したものを使用した<sup>8)</sup>。学生にはアンケート配布前に書作品を配布し、それぞれの書に関する情報や知識の有無について確認をしたが、全員が作品は「見たことがない」との回答であった。

アンケートでは、書作品に対し、次のように 2 つの質問項目を設けた。質問 1) 日本人が書いた書を選ぶ、質問 2) 直観で「いいな」と思う書を 2 つ選び理由を書く、である。

#### 3-2. 鑑賞で取り上げた書作品と質問項目

今回取り上げた書について見ていく。アンケートの質問項目の 1) 2) に対して、それぞれ異なる書を取り上げた。作品選択の際に注意したこととしては、作品の位置付けに偏りが少ないと判断されるものかどうかである。そのための一つの基準として、今回の調査では高等学校芸術科書道の教科書で取り上げられていることとし、実際に作品を選ぶ際には、東京書籍の『書道Ⅰ』（平成 18 年検定済）・『書道Ⅱ』（平成 19 年検定済）・『書道Ⅲ』（平成 16 年検定済）に拠った。

また、日本人学生と中国人留学生の回答を比較するため、日本独自の仮名作品は取り上げず、全て漢字作品を対象とした。

## 3-2-1. 質問1)「日本人が書いた作品を選ぶ」の書と質問意図

ここで取り上げたのは、日本の江戸時代、中国の清時代までの書であり、古典の範疇に入るものである。楷書・行書・草書の3書体の書を、日本と中国のものからそれぞれ2作品ずつ選び、計12作品を対象とした<sup>9)10)</sup>。表1に記す。

表1 質問1)で取り上げた書

記号	書	書体	作家	国・時代
あ	前後赤壁賦	行書	趙孟頫	中国・元
い	真草千字文	楷書	智永	中国・隋
う	自叙帖	草書	懷素	中国・唐
え	草書臨王羲之帖軸	草書	王鐸	中国・明
お	風信帖・第三通(忽恵帖)	行書	空海	日本・平安
か	楷書五言聯	楷書	趙之謙	中国・清
き	松風閣詩卷	行書	黄庭堅	中国・宋
く	玉泉帖	楷書	小野道風	日本・平安
け	草庵雪夜作	楷書	良寛	日本・江戸
こ	伊都内親王願文	行書	伝橋逸勢 <sup>11)</sup>	日本・平安
さ	離洛帖	草書	藤原佐理	日本・平安
し	楽毅論	楷書	光明皇后	日本・奈良

当然であるが、日本の書は中国書法の影響を受けて始まっており、現在までその影響は継続している。日本の書は、中国書法の影響なくしては成立しない。例えば、奈良時代には東晋の王羲之や隋唐の書風がもたらされ、平安時代には空海らの留学僧により中国書法を基盤としながら日本独自の書法に大きな発展が見られた。【し：楽毅論】を例に挙げると、奈良時代に光明皇后が王羲之「楽毅論」を臨書したもので、王羲之の特色がよく捉えられた書であり、当時の書が中国の影響を受けていることが明らかである。

中国人による書と、上記したように中国書法の影響を受け日本人によって書かれた書に、日本人学生と中国人留学生で捉え方に何らかの差があるのか、また、その差は日本人学生と中国人留学生にある程度の傾向があるのかを見ることによって、それぞれが「日本の書」と感じ取る基準を明らかにすることを目的とした。回答の際は、12種類の書の中から「日本人による書」と感じられたものを全て記号で書くように指示した。

## 3-2-2. 質問2)「直観で「いいな」と思う書を2つ選び理由を書く」の書と質問意図

ここで取り上げたのは、日本の現代作家の書(昭和から平成にかけて発表された作品)、11作品であり、全て東京書籍『書道Ⅲ』に掲載されている作品である<sup>12)</sup>。

11作品を表2に示す。

表2 質問2)で取り上げた書

記号	書作家	作品解説 <sup>13)</sup>
A	西川寧	六朝風楷書を基盤とし、点画の端々まで力を充実させた作品。
B	赤羽雲庭	自然な用筆で運筆に無理がなく、素朴で気宇の雄大な作品。
C	手島右卿	象形文字(篆書)を淡墨の潤筆と濁筆で、大胆に表現した迫力にあふれた作品。
D	村上三島	すっきりした透明感のある線を主にした、明るい、上品な作品で、良寛の書を彷彿とさせる。

E	松本芳翠	形の整った作品で、線を引き締め、細部にも注意を払った、安定感のある作品。
F	松井如流	構えの大きい一字書。大きく運腕し、懐の広い、包み込むような豊かさを表現した作品。
G	鈴木翠軒	やや細身の線で淡墨を用い、自在に運筆した、動きの大きな作品。潤渴の変化に工夫がなされている。
H	青山杉雨	一点一画の線の変化が多彩で、金文造形のおもしろさを発揮した作品。小字の落款も作品を引き締めている。
I	上田桑鳩	紙面の下方に一字を配し、周りの余白を生かした作品。線の響きと空間のバランスが特徴的である。「品」を書いて、題名を「愛」とし、話題を呼んだ。 <sup>14)</sup>
J	栗原蘆水	一本一本の線に表情を加えて、点画に変化を追究している。線の厚味を生かした作品。
K	小坂奇石	字形の変化に工夫を凝らし、ゆったりとした余白の美しさと大きさが感じられる作品。

これらの書は、様々な流れを汲む作品であり、漢字書の広がりを感じとれるものである。日本人学生と中国人留学生が書をどのような観点から見ているのかを明らかにするために、書表現が多岐に渡る様々な書を取り上げた。

質問では、これらの書を見て、直観で「いいな」と感じる作品に順位を付け 2 つ選び記号で記し、そう感じた理由をそれぞれ記述してもらった。

では、4. 5. で質問 1) 2) の回答結果の分析と考察を行っていく。

#### 4. 質問 1) 「日本人が書いた作品を選ぶ」アンケート結果と考察

まず、質問 1) 「日本人が書いた作品を選ぶ」のアンケート結果を表 3 に示す。％は「日本人が書いた書」として選んだ割合である。網掛けは中国人留学生より日本人学生が「日本人が書いた作品」と判断した割合が多かった書である。

表 3 質問 1) 「日本人が書いた作品を選ぶ」アンケート結果

記号	書体	作家	国・時代	日本人学生 (%)	中国人留学生 (%)
あ	行書	趙孟頫	中国・元	34%	5%
い	楷書	智永	中国・隋	40.4%	15%
う	草書	懷素	中国・唐	55.3%	30%
え	草書	王鐸	中国・明	40.4%	40%
お	行書	空海	日本・平安	55.3%	15%
か	楷書	趙之謙	中国・清	14.9%	50%
き	行書	黄庭堅	中国・宋	25.5%	35%
く	草書	小野道風	日本・平安	51.1%	20%
け	楷書	良寛	日本・江戸	14.9%	60%
こ	行書	伝橋逸勢	日本・平安	38.3%	0%
さ	草書	藤原佐理	日本・平安	48.9%	40%
し	楷書	光明皇后	日本・奈良	6.4%	15%

##### 4-1. 日本人学生が「日本の書」と見る観点－「やわらかさ」と「流れ」－

日本人学生の 30%以上が「日本の書」と感じ、なおかつ、中国人留学生より割合が高い書（網掛けのある

書)を見ていくと、学生が「日本の書」と見る観点は「やわらかさ」と「流れ」にあることがうかがえる。

【あ：趙孟頫】【い：智永】は中国の書であるが、それぞれ 34%、40.4%の学生が日本の書と感じている。

【あ：趙孟頫】は行書であるため、転折の抑えが軽く、文字全体にやわらかさを感じる。【い：智永】は楷書であるが、【あ：趙孟頫】と同じように、転折の抑えが軽く、右払いの抑えもおおらかであり、はねも小さめである。

【う：懷素】【え：王鐸】も中国の書であるが、それぞれ 55.3%、40.4%の学生が日本の書と感じている。双方とも草書であるため、点画の強い抑えは少ない。多くの連綿も使用されており、流れを感じる書になっている。

【お：空海】【く：小野道風】【こ：伝橋逸勢】【さ：藤原佐理】は日本の書であり、それぞれ 55.3%、51.1%、38.3%、48.9%の学生が日本の書と感じている。【お：空海】【こ：伝橋逸勢】は行書で、【く：小野道風】【さ：藤原佐理】は草書である。

【お：空海】の書の根底には王羲之の書法があり、留学僧として入唐した際には、顔真卿や様々な書風を学び、その後独自の日本的な書法を築き、平安時代初期の「日本書道史空前の質的向上」<sup>15)</sup>に最も貢献した人物である。【お：空海】にも2~3文字の連綿が使われている。【こ：伝橋逸勢】は連綿の使用はないが、一文字一文字が非常に滑らかな線質をしており、文字の流れが感じられる書である。

【く：小野道風】【さ：藤原佐理】は、894年に遣唐使廃止後、「中国書法や三筆(空海・嵯峨天皇・橘逸勢)を踏まえ、新鮮味のある日本特有の「和様」を確立した」として日本書道史における位置付けが高く、小野道風の書は「転折がまるやかで、全体的に温和で優美な字姿」であり、藤原佐理の書は「巧妙な草書」とされている<sup>16)</sup>。【く：小野道風】は、連綿が濃墨で大きく書かれているため、その部分に学生が影響された可能性もあるが、潤渴を生かした書で、渴筆で少し小さく書かれた文字にも連綿や流れるような運筆が見られる。【さ：藤原佐理】は連綿を使用しながら、筆が自由奔放に動き、やわらかい線での流れを感じる書である。

これら4つの日本の書は全て平安時代のものであるが、仮名文字誕生への流れの中に位置付けられる書であり、文字の崩し方や運筆、連綿などを通し、これらの書に仮名へのつながりを感じとっていたとも考えられる。

以上、日本人学生が「日本の書」として選んだ書の特徴を見てきた。学生が「日本の書」と考える観点は、点画や文字のやわらかさ、連綿や点画の崩しによる流れ、の2点にまとめられるであろう。

#### 4-2. 中国人留学生在「日本の書」と見る観点—「のびやかさ」「やわらかさ」「流れ」—

中国人留学生在が「日本の書」と見る観点は、日本人学生の観点と同様の「やわらかさ」「流れ」に加え、「のびやかさ」であると考えた。以下では、日本人学生との比較も随所で取り上げながら、留学生的観点を見ていく。

日本人学生より多くの留学生在が「日本の書」と感じた書は、まず、【か：趙之謙】【き：黄庭堅】で、それぞれ 50%、35%である。【か：趙之謙】は楷書で、【き：黄庭堅】は行書である。この二つは書体も異なるが、【き：黄庭堅】は右上がり強く、鋭い線質も感じられ、【か：趙之謙】のほうはかなり重厚な線質である。一見捉えにくいかもしれないが、この両者の共通点として考えられるのが左右へののびやかさである。線質は異なるが、一面を左へ長く伸ばしたり、左右の払いを大胆に伸ばしたり、文字を広げる運筆が見られる。

次に、【う：懷素】【え：王鐸】を見ていきたい。日本人学生よりは少ない数値であるが、それぞれ 30%、40%と3割以上の留学生在が「日本の書」として選んでいる。この2つの書の特徴は、4-1.で述べたように、点画の抑えは強くなく、多くの連綿が使われており、流れを感じるものである。やわらかさ、流れを感じることも、「日本の書」を選ぶ基準となっているといえるだろう。

【し：光明皇后】を「日本の書」としたのは、日本人学生が 6.4%、留学生在が 15%と留学生在が若干多いが、

双方とも決して多い数ではない。【し：光明皇后】は王羲之「楽毅論」を臨書したものであり、王羲之書法が如実に表現されている。細い線で鋭さを感じる線質でもある。書道史の上で日本の書が出始める平安以前の書であり、中国書法の影響がそのまま線質にも表れ、その結果「日本の書」とする者は少なかったであろう。

【お：空海】【く：小野道風】【こ：伝橋逸勢】を「日本の書」と感じた留学生は、それぞれ15%、20%、0%である。日本人学生の場合は40%強以上が「日本の書」としており、数値から見ると対照的である。これらの3つの書は、日本書道史においては日本独自の書を生み出し、発展させ、仮名文字誕生の流れの中に位置付けられる。しかし、一方で、中国書法も強く受けている書である。小野道風は『天徳三年八月十六日關詩行事略記』には「能書の絶妙なり。羲之の再生す<sup>17)</sup>」との記述が見られるほどの能書であり、王羲之の書法が色濃く出ている書としてとらえることもできる。同じ書に対して、日本人学生は「日本らしさ」を感じとり、留学生は「中国らしさ」を感じとった結果が、この数値の違いに現れていると考えられる。

最後に、【け：良寛】を見ていく。「日本の書」と感じたのは、日本人学生14.9%、留学生60%であり、日本人である学生に比べ、非常に多くの留学生が「日本の書」ととらえている。良寛の書は楷書を取り上げたが、線の肥瘦に変化が少なく、細い線で書かれているため、日本人学生は堅さを感じ、「日本の書」とは感じなかったのだろうか。一方、留学生は細い線で書かれていることで、一文字一文字、全体の構図が非常に伸びやかになっており、また、素朴さも感じとり、「日本の書」と判断したのではないだろうか。

以上、日本人学生と中国人留学生が「日本の書」とする観点を探ってきた。両者に共通するのが「やわらかさ」「流れ」であり、留学生の観点には更に「のびやかさ」が加わると考えられる。また、同じ書に対しても、日本的なもの中国的なものを感じるのか、やわらかさ堅さを感じるのか、といった捉え方の違いが見られた。

## 5. 質問2)「直観で「いいな」と思う書を2つ選び理由を書く」のアンケート結果と考察

まず、質問2)「直観で「いいな」と思う書を2つ選び理由を書く」で、「いいな」と思った書の選択結果について、アンケート結果を表4に%で示す。

表4 質問2)「直観で「いいな」と思う書2つ」アンケート結果

記号	書作家	日本人学生 (順位)		中国人留学生 (順位)		作品解説 (表2 同内容)
		1 番目	2 番目	1 番目	2 番目	
A	西川寧	6.4% (7)	12.8%	5% (5)	10%	六朝風楷書を基盤とし、点画の端々まで力を充実させた作品。
B	赤羽雲庭	4.3% (8)	6.4%	0% (7)	0%	自然な用筆で運筆に無理がなく、素朴で気宇の雄大な作品。
C	手島右卿	14.9% (2)	4.3%	0% (7)	0%	象形文字(篆書)を淡墨の潤筆と渴筆で、大胆に表現した迫力にあふれた作品。
D	村上三島	10.6% (4)	14.9%	35% (1)	5%	すっきりした透明感のある線を主にした、明るい、上品な作品で、良寛の書を彷彿とさせる。
E	松本芳翠	14.9% (2)	17%	35% (1)	30%	形の整った作品で、線を引き締め、細部にも注意を払った、安定感のある作品。
F	松井如流	10.6% (4)	4.3%	0% (7)	5%	構えの大きい一字書。大きく運腕し、懐の広い、包み込むような豊かさを表現した作品。
G	鈴木翠軒	0% (10)	4.3%	10% (3)	0%	やや細身の線で淡墨を用い、自在に運筆した、動きの大きな作品。潤渴の変化に工夫がなされている。
H	青山杉雨	23.4% (1)	12.8%	5% (5)	25%	一点一画の線の変化が多彩で、金文造形のおもしろさを発揮した作品。小字の落款も作品を引き締めている。

## 書作品を見る観点

I	上田桑鳩	4.3% (8)	8.5%	0% (7)	0%	紙面の下方に一字を配し、周りの余白を生かした作品。線の響きと空間のバランスが特徴的である。「品」を書いて、題名を「愛」とし、話題を呼んだ。
J	栗原蘆水	10.6% (4)	8.5%	10% (3)	25%	一本一本の線に表情を加えて、点画に変化を追究している。線の厚味を生かした作品。
K	小坂奇石	0% (10)	0%	0% (7)	0%	字形の変化に工夫を凝らし、ゆったりとした余白の美しさと大きさが感じられる作品。

日本人学生の場合、1番目によいとしたものの中で【G 鈴木】と【K 小坂】は0%であり、この2作品は2番目でも4.3%、0%と低かった。中国人留学生の場合、1番目によいとしたものの中で【B 赤羽】、【C 手島】、【F 松井】、【I 上田】、【K 小坂】の5作品が0%であり、この5作品は2番目でもF松井の5%を除き、全て0%であった。このように、学生、留学生の「いいな」と感じる書に関しては、何らかの傾向があることがうかがえる。

では、学生と留学生の各作品を選んだ理由の記述を基に、書を見る際に「いいな」と感じる観点を分析し、それぞれの傾向を考察していく。

### 5-1. 書を見る観点の分析と考察

では、質問2)「直観で「いいな」と思う書を2つ選び理由を書く」での理由として書かれた内容を観点別に分析し、考察を行う。アンケートで書作品の中から2つ(1番目と2番目)を選ぶこととしたのは、書に対する感じ方の傾向が見やすくなり、多くの記述を通して書を見る観点がより明らかにできると考えたからである<sup>18)</sup>。

日本人学生と中国人留学生の記述を見ると、単に「おもしろい」「いいな」といった内容ではなく、より具体的な観点のポイントが書かれていた。5-2. で詳しくみていく。

### 5-2. 書作品の観点の分析と考察

ここでは、書作品ごとに観点の分析と考察を行い、日本人学生と中国人留学生の書を見る観点を明らかにしていく。表の(数字・数字)は、1番目と2番目に「いいな」と選んだ者の%である。また、[ ]は同じ記述内容の数である。

#### 【A: 西川】

A	日本人学生 (6.4%・12.8%)	中国人留学生 (5%・10%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読める [2]</li> <li>・一つ一つがはっきり [3]</li> <li>・一画一画を力強い [2]</li> <li>・一文字一文字丁寧 [2]</li> <li>・止めやハネに強弱</li> <li>・文字の大きさに変化</li> <li>・線の太さに変化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きちんと整っている [2]</li> <li>・字ごとに形がはっきりしている</li> <li>・筆をとどめる、書くのをちょっと止めて、筆を置く、筆を入れるべきところでちょっと筆を止める</li> </ul>
構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一列にきれいに並んでいる [2]</li> <li>・整っている</li> <li>・均一的</li> </ul>	
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力強い</li> <li>・勢い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生き生きとしている</li> </ul>

日本人学生の場合、文字について、まず「読めるかどうか」の記述があり、運筆の強弱や丁寧さ、線の太さの変化、文字の大きさに触れられている。構成については、配列や全体的な統一感を感じ取っており、書への印象には力強さや勢いを感じている。

中国人留学生の場合、文字については、整い、はっきりした字形とし、具体的な運筆の記述もある。作品からは生き生きとした印象を受けている。

【B：赤羽】中国人留学生 (0%・0%)

B	日本人学生 (4.3%・6.4%)
文字	・読みやすい [3] ・行書と楷書が交じっている ・楷書 ・「山」の最終画の書き方が独特 ・「山」の三画目は行書がよく表れている
印象	・力強い [2] ・勢いがある ・一字一字に魂がこもっているよう ・上手さはないが力強い ・自分も真似して書けそう

中国人留学生で選択したものはいない。日本人学生は、まず、「読めるかどうか」の記述があり、文字に対しては、書体、一文字に対しての運筆の記述があり、印象としては、力強さや勢いを感じている。

【C：手島】中国人留学生 (0%・0%)

C	日本人学生 (14.9%・4.3%)
文字	・何を書いてあるかわからない [5] ・普通に漢字ではなく由来？みたいなのを書いている ・象形文字のよう [2] ・とめはねにキリッとしていない ・ゆるやかな曲線
構成	・左右のパーツが対立 ・字の固まり感
墨色	・淡い色合い ・墨の濃淡おもしろい ・にじみ
印象	・おもしろい [2] ・かっこいい [2] ・やわらかい ・文字に動きがある ・躍動感 ・生き生きとしている ・虫の形態のよう ・絵みたいでおもしろい ・形自体に何か意味がありそう ・好奇心を掻き立てられる ・書き手の感情が伝わってくる ・趣深い ・自分も書いてみたい

中国人留学生で選択したものはいない。日本人学生は、まず「何が書いてあるかわからない」との記述が多くあり、文字に対しては書体、点画、線質についての記述があり、構成や墨色についても触れられている。構成、墨色については、この作品の大きな特徴である。作品から受けた印象には様々な記述が見られた。文字の動きを感じ取っていたり、絵的に捉えているものもある。このような幅広い印象を導ける作品である。

【D：村上】

D	日本人学生 (10.6%・14.9%)	中国人留学生 (35%・5%)
文字	・何が書いてあるかわからない ・崩された字 [2] ・細くて細かい字 [2] ・細い線 [2] ・太さが一定 ・均一的な線 ・流れるような筆運び ・サラッと書いている [2] ・一画一画の区切りがない ・字をつなげている ・ハネや払いなどの線に強弱	・何が書いてあるかわからない ・字が流暢 [3] ・草書 [2] ・細い字 [2]
構成	・行間がしっかりとれている ・文字の大きさに変化	
墨色	・あまりかすれがない	
用具 用材	・筆ではなくサインペンで書いたよう [2]	
印象	・雰囲気がいい ・きれい ・繊細 ・ごちゃごちゃしたイメージがない ・すっきり ・さっぱり ・やわらかさ ・優しさ	・豪快 ・心の広い人が書いた ・力強い ・元気 ・迫力がある [2] ・だらだらしていない ・一気に書いた ・きれい ・洒脱

1番目に選んだのは、中国人留学生のほうが多い作品である。



## 書作品を見る観点

日本人学生は、まず「何が書いてあるかわからない」と書いた者も1名いたが、それ以上に文字への細かな記述が多く見られた。細い線で流れるような運筆の中で、点画の強弱を感じている。均一的な細い線から、用具はサインペンのような記述も見られた。構成、墨色についても触れられている。作品からの印象は、すっきり、さっぱりと明るい印象と同時に、やわらかさや優しさも感じ取っている。

中国人留学生にも「何が書いてあるかわからない」という記述があった。文字に対しては、字が流暢、流れるようであるという記述があり、書体についても触れられていた。作品からの印象は、日本人学生には見られなかった「豪快・力強い・元気・迫力がある」という記述が見られた。細く流れるような線質の中に、基盤にある線の強さを感じ取っていることがうかがえる。

### 【E：松本】

E	日本人学生 (14.9%・17%)	中国人留学生 (35%・5%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読みやすい [5]</li> <li>・わかりやすい [3]</li> <li>・一字一字がはっきりしている [2]</li> <li>・字のバランスが整っている [3]</li> <li>・文字が力強く書かれている [2]</li> <li>・太く書く、細く書くがはっきりしている [2]</li> <li>・線が太い</li> <li>・「里」が好き</li> <li>・止めやはらいなどしっかりしている [2]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・わかりやすい [2]</li> <li>・読める</li> <li>・字が整っている [2]</li> <li>・字のバランスがよい</li> <li>・画がはっきりしている</li> <li>・曲がる画 (九) が豪快</li> <li>・字の構造がはっきりしている [2]</li> </ul>
構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余白がいい</li> <li>・シンプル</li> <li>・一字一字が同じ大きさ</li> </ul>	
墨色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・濃くはっきり書かれている [2]</li> </ul>	
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・力強い [4]</li> <li>・やさらかさ</li> <li>・上手い [2]</li> <li>・美しい</li> <li>・きれい [2]</li> <li>・すっきり</li> <li>・日本の書初めのような</li> <li>・こんな字が書きたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡潔</li> <li>・余計な装飾ない</li> <li>・素朴</li> <li>・おっとりしている</li> <li>・きちんとしている [5]</li> <li>・端正</li> <li>・力強い [4]</li> <li>・センテンスの意味が好き [2]</li> </ul>

この作品も1番目に選んだのは、中国人留学生のほうが多い。

日本人学生は、まず、「読みやすい」「わかりやすい」という記述が多く見られた。文字については、一字一字の字形が整えられ、一点一画の運筆が力強いことに触れられている。構成については、文字の大きさが統一され、余白が活かされていることが挙げられており、墨の濃さも感じている。作品からは、力強さや上手さ、きれいさやすっきりした印象を受けている。

中国人留学生も、まず、「わかりやすい」「読める」という記述があり、文字については、字形が整っていること、点画が明確に書かれていることが挙げられている。印象としては、「簡潔」「余計な装飾がない」「素朴」といった技巧的でないことが挙げられており、また、「きちんとしている」「力強い」という記述も多く見られた。中国人であることから、書かれた文言の意味を読み取り、意味も含めて良さを感じ取っている記述もあった。

### 【F：松井】

F	日本人学生 (10.6%・4.3%)	中国人留学生 (0%・5%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字なのだろう</li> <li>・曲線</li> </ul>	
墨色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・薄い墨 [3]</li> <li>・かすれ</li> <li>・にじみ [3]</li> </ul>	
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水墨画のような</li> <li>・鳥のような絵</li> <li>・文字だとしたら、文字と絵の融合</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由な小鳥が、樹の枝にとまっているよう</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・やわらかい</li> <li>・優しい</li> </ul>	
--	--	--

日本人学生は、まず「文字なのだろう」という記述があり、文字については線についてのみの記述が見られた。墨色については、この作品の特徴である、薄墨やにじみ、かすれについて記述が見られた。印象としては、絵的なものを感じており、曲線、薄墨やにじみから「やわらかさ」も受け取っていたようである。

中国人留学生は選んだ者が非常に少なかったが、やはり絵的なものだと感じたようである。

【G：鈴木】

G	日本人学生 (0%・4.3%)	中国人留学生 (10%・0%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・流れる筆運び</li> <li>・線と線のどこがつながり、どこが切れているのか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・字が流れている</li> </ul>
書く過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書いているところを見たい</li> </ul>	
印象		<ul style="list-style-type: none"> <li>・乱れているようで整然</li> <li>・きれい</li> </ul>

日本人学生も中国人留学生も選んだ者は非常に少なかった。

日本人学生は、文字の運筆について記述が見られ、そこから書く過程についても触れられていた。

中国人留学生は、文字が流れるように書かれており、一見乱れているようだがまとまりがあることを感じている。

【H：青山】

H	日本人学生 (23.4%・12.8%)	中国人留学生 (5%・25%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読めない</li> <li>・字が力強い [4]</li> <li>・線の太さの変化 [3]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何が書いてあるかわからない [2]</li> <li>・筆の運びが強い</li> <li>・字の構造 [2]</li> </ul>
構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2文字の大きさ [2]</li> <li>・大きい2文字と横の小さい文字のバランス</li> <li>・文字と朱印のバランス</li> <li>・余白</li> </ul>	
墨色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かすれ [11]</li> </ul>	
書く過程		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちゃんと考えてから書いた作品</li> </ul>
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かっこいい [4]</li> <li>・迫力がある</li> <li>・部屋に飾りたい</li> <li>・堂々としている [2]</li> <li>・力強い [4]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飄逸</li> <li>・力強い [3]</li> <li>・気迫</li> <li>・絵のよう</li> </ul>

日本人学生が1番目に最も多く選んだ作品である。中国人留学生も2番目も含めると多くの学生がよさを感じている作品である。

日本人学生は、まず「読めない」という記述があり、文字の力強さや運筆の強さや太さの変化について触れられている。構成については、中心となる2文字と添え書きの小さな文字とのバランスや、落款へ気づきなど、作品全体を見ている様子がうかがえる記述があった。墨色もかすれについては11名もの記述があり、この作品おいてのかすれの役割の大きさを感じられた。作品からの印象は、力強さに関する内容やかっこいいという記述があった。

中国人留学生も、まず「何が書いてあるかわからない」という記述があり、文字の運筆の強さや字の構造について触れられていた。「ちゃんと考えてから書いた作品」という記述もあり、字の構造が十分に表現されている作品であるからこそ感じたのであろう。印象は、強さや気迫を感じていた。

書作品を見る観点

【I：上田】中国人留学生 (0%・0%)

I	日本人学生 (4.3%・8.5%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「品」という字だと思ふ</li> <li>・象形文字のよう</li> <li>・大きな字</li> <li>・「品」の「口」の形が様々 [2]</li> <li>・3つの「口」の大きさが変化</li> </ul>
書く過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書いている風景が見える感じ</li> </ul>
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形の変化で何か伝えようとしている</li> <li>・大きさや形の変化にどのような意図があるのか知りたい</li> </ul>

中国人留学生で選択したものはいない。

日本人学生もこの作品を選んだ者は多いとは言えない。まず、「品」という字だと思ふ」という記述があり、文字については「品」という字を書いているという前提で、「口」の形や大きさの変化に触れられていた。それを書いている風景を想像している記述もあった。作品から受ける印象としては、「何か伝えようとしている」「変化の意図を知りたい」といった記述があり、この作品が何を表そうとしているのかを知りたいという気持ちが見られた。注14) で記したように、この作品は「孫がハイハイするイメージ」から書かれており、文字以上のものを学生も感じられたようである。

【J：栗原】

J	日本人学生 (10.6%・8.5%)	中国人留学生 (10%・25%)
文字	<ul style="list-style-type: none"> <li>・字が読める [2]</li> <li>・「暇」のバランス</li> <li>・「暇」の「日」の丸み</li> <li>・字に丸み</li> <li>・字の形が統一</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行書</li> <li>・字の形が整っている [2]</li> <li>・字が力強い</li> </ul>
構成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・字数がちょうどいい [2]</li> <li>・字の大きさが均一</li> <li>・行がそろっている [2]</li> <li>・字間が均一 [3]</li> <li>・余白がいい [2]</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・字の配置がよい</li> <li>・字間が均一</li> <li>・対称的な配置 [2]</li> </ul>
墨色	<ul style="list-style-type: none"> <li>・かすれ</li> </ul>	
印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・整っている</li> <li>・すっきりしている</li> <li>・安定感</li> <li>・落ち着いている</li> <li>・お手本に書きたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きちんとしている [3]</li> <li>・力強い</li> <li>・重厚</li> <li>・雄勁</li> <li>・活気がある</li> <li>・落ち着いた感じ</li> <li>・まろやか</li> </ul>

日本人学生は、まず「字が読める」という記述があり、文字については、字の丸み、字形の統一の他に、「暇」という一字に対しての記述が見られた。構成では、文字の大きさ、行、字間が統一されており、余白の効果を感じ取れており、墨色ではかすれにも触れられていた。作品からの印象では、「整っている」「安定感」「落ち着いている」という記述が見られたが、これは、書風の統一性や構成上の一定感から醸し出されたものであろう。

中国人学生は、文字については、整った字形や文字の力強さを感じており、構成については、文字の配置、均一した字形についての記述が見られた。作品からの印象では、「きちんとしている」「力強い」「落ち着いている」という記述があったが、日本人学生と同様に文字や構成の面から来る印象であろう。

【K：小坂】日本人学生 (0%・0%)・中国人留学生 0%・0%

【K：小坂】の作品については、両学生共、0%であった。この結果の考察については、後述することとする。

5-3. 日本人学生・中国人留学生の書を見る観点と傾向

5-2. で取り上げた、日本人学生と中国人留学生の記述内容を基に、両学生の書を見る観点と傾向をまとめる。

まず、両学生の記述に多く見られたのは、「読める・読めない」あるいは「(書いてある文字が) わかる・わからない」という内容である。【G：鈴木】以外の書に対して、全てこれらの記述が見られる。このことから、両学生共「書には文字が書かれている」という共通認識があることがうかがえる。「文字が書かれた書」を見ようとしているのである。

では、書を見ることを「読める・読めない」「わかる・わからない」から始め、両学生の相違点を見ていきたい。なお、以下では、「読める・読めない」「わかる・わからない」を「文字の判読」と表現していく。

日本人学生の場合、全ての文字ではないにせよ「文字の判読が可能」であるとの記述が見られた【A：西川】【B：赤羽】【E：松本】【J：栗原】を1番目あるいは2番目に選んだ学生は4.3%から17%であり、その中でも【E：松本】は1番目14.9%、2番目17%と多くの学生が選択している。これらの4つの書は、連綿は使われず、一点一画に力が込められている重厚な線質であり、構成面でも行間や字間が比較的統一されており、すっきりした印象や安定感を感じているのであろう。中国人留学生の場合、【E：松本】35%・30%、【J：栗原】10%・25%とこの2作品のポイントが高い。この理由も日本人学生の場合と同様であろう。しかし、中国人留学生は【B：赤羽】を選んだ者はおらず、0%・0%である。【B：赤羽】の書は、日本人学生の記述にあるように「上手さはない」「自分も真似して書けそう」と、一見「稚拙さ」を感じる作品である。日本人学生の場合は、そこに「魂」や「勢い」を感じるなど別の観点が加わっているが、中国人留学生の場合はそのような観点が見られなかった。留学生の場合は、文字が整っていることに重点が置かれているようである。

次に、日本人学生の場合、「文字の判読が不可能」であるとの記述があった【C：手島】【D：村上】【H：青山】、「文字なのだろう」という記述の【F：松井】、「品」という字だと思う」という記述の【I：上田】、文字かどうかの記述がなかった【G：鈴木】について見ていく。まず、「判読不可能」な【C：手島】は14.9%・4.3%、【D：村上】は10.6%・14.9%、【H：青山】は23.4%・12.8%と高いポイントであり、【H：青山】は日本人学生が1番目に最も多く選んだ書である。【C：手島】【H：青山】は篆書、【D：村上】は草書であり、読める学生はいないと考えられるが、「いいな」と思う学生は多かった。各作品への記述を見ると、【C：手島】には絵的な要素をも感じ取っており、【H：青山】には線や運筆の力強さから作品全体の迫力を感じている。【D：村上】は流れるような文字や細い線質からすっきりした印象ややわらかさを感じている。【F：松井】についても、「鳥のよう」「文字と絵の融合」という記述があり、【C：手島】に通じる捉え方をしていると考えられる。【I：上田】にも文字的なことを感じながらも、作品には何か伝えたいことがあるのではないかと文字以外の情報を探ろうとしている様子が見える。【G：鈴木】には、線の流れを追っている記述があり、文字として捉えている可能性が高い。以上から、日本人学生の場合は、「判読不可能」であっても、「文字」として捉える場合と、「絵的な要素を含んだ文字」<sup>19)</sup>として捉える場合があり、両方の捉え方が可能であることがわかる。

では、同じ作品に対して、中国人留学生がどのような捉え方をしているのかを見ていく。日本人学生が絵的なものを感じた【C：手島】【I：上田】を選んだ留学生はおらず、【F：松井】も2番目として選んだものが5%いるだけである。絵的な要素を含んだものを書きとしては見ない傾向がうかがえる。一方で、【D：村上】は35%・5%、【H：青山】は5%・25%と多くの留学生がよさを感じている。【D：村上】への記述は、流れるような細い字に対して迫力や力強さ、そしてきれいさを感じている。【H：青山】には運筆の強さや字の構造についての記述があり、作品の強さを受け止めている。このように【D：村上】【H：青山】に対しては、「判読不可能」であっても「文字」として感じており、書として捉えることができている。

以上の内容を踏まえ、日本人学生・中国人学生がよさを感じるとはしなかった【K：小坂】の書についてみていく。草書が中心の作品であるため、おそらくほぼ全ての学生・留学生が「判読不可能」であるが、「文字」として捉えられる範疇であろう。この作品は、3-2-2表2の作品解説のように「字形の変化に工夫を凝らし、ゆったりとした余白の美しさと大きさが感じられる作品」である。しかし、学生・留学生には、「文字」とし

て捉えられたとしても、変化や工夫が多岐に渡り、運筆を追うことが難しく、全体的な統一感や安定感を感じることが難しかったと推測できる。そのため、結果的によさが感じられなかったのであろう。

## 6. まとめ—日本人学生と中国人留学生の書を見る観点—

まず、日本人学生と中国人留学生の「日本の書」の捉え方が明らかになった。日本人学生の場合は「やわらかさ」と「流れ」、中国人留学生の場合はこれらに「のびやかさ」が加わる。

また、書を見る観点としては、5. の内容を図で表すと以下になるであろう。

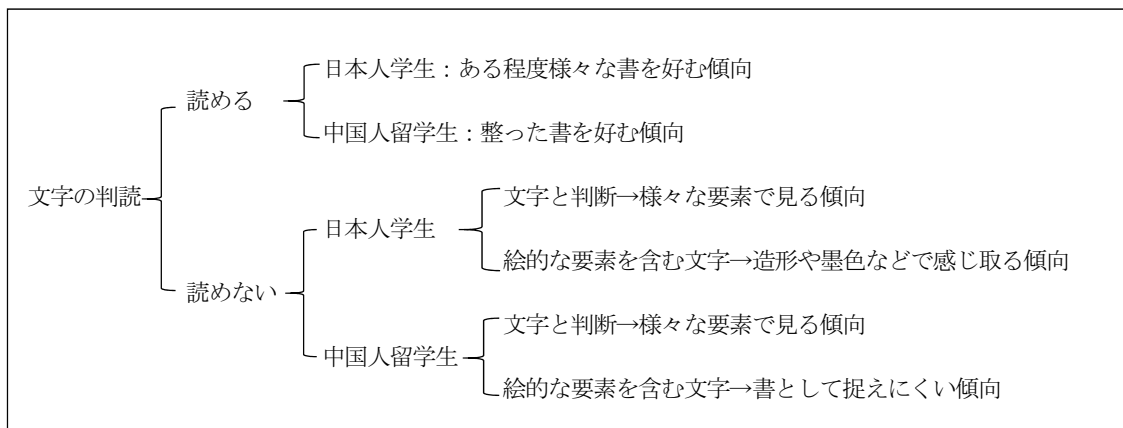


図 日本人学生と中国人留学生の書を見る観点

日本人学生と中国人留学生共に、文字の判読から書を見るのが始まり、日本人学生の場合は、読める・読めないに関係なく作品を見ることは可能であるが、中国人留学生の場合は、読める場合には整った書を好む傾向があり、読めない場合の絵的な要素を含む文字の場合には、書として捉えにくい傾向があることが、本稿で明らかにできた。

## 7. 今後の課題

本稿では 6. に記したように、日本人学生と中国人留学生の書を見る観点に違いがあることが示唆できた。しかし、数的調査としては十分な数ではなく、今後もさらに詳細について調査を進めていく必要がある。今回は漢字文化圏の日本人と中国人との比較であったが、更に非漢字文化圏の人が如何に書を捉えるのかについても調査研究を進めていきたい。また、今回の調査の結果、中国人留学生に良寛の書を彷彿とさせる【D：村上】の書によさを感じる傾向がうかがえた。このことから、非常に日本的とされる良寛の書が中国人をはじめとした外国人にとって、どのような魅力があるのかについても考える糸口が得られた。以上、今後の課題としたい。

注：

- 1) 大学院での開講授業
- 2) 全国大学書道学会編 (2013) 『書の古典を理論』光村図書出版、p.96
- 3) 上條信山 (1993) 「書とは何か」『新書写書教育辞典—理論と実践』木耳社、p.2

- 4) 上條、上掲書、p.4
- 5) 上田桑鳩（1963）『書道鑑賞入門』創元社、p.203
- 6) 藤森大雅（2014）「書の鑑賞に関する一考察」『大東書道研究』vol.21、p.45
- 7) 藤森、上掲論文、p.56
- 8) 書作品の鑑賞をする場合、本来であれば、実際の作品を見るべきであるが、今回取り上げた作品を一度に見ることは不可能であり、縮小カラー印刷したものを使用した。また、資料1「え・け」以外の書は作品の一部である。
- 9) 作品については、資料1を参照されたい。
- 10) 東京書籍『書道Ⅲ』（平成25年検定・平成27年発行）の鑑賞では、楷書と行書に関しては日本と中国の書の比較が取り上げられている。
- 11) 現在、橘逸勢の真跡と認定できるものは存在しておらず、この書が逸勢によって書かれたものだと確証できないため、名前の前に「伝」を付記してある。
- 12) これらの11作品は、昭和から平成の現代作家による作品であるため、著作権上、本稿には掲載することができない。作品については、東京書籍『書道Ⅲ』（平成16年検定済・平成18年発行）のpp.48-51を参照されたい。
- 13) 作品解説は、『書道Ⅲ』から引用した。
- 14) この上田桑鳩の作品『愛』は1951年に発表され、書道界で物議を醸した作品である。「品」という漢字とも読める作品である。空間をとって、四角形や五角形に見えるものを3つ書いており、タイトルを『愛』としたのは、孫がハイハイするイメージで書いたものであるからとされている。「文字を書く」のが書であるという視点に立つと、この作品に対する評価を行うのは非常に困難である。上田自身は、この作品の発表後、前衛書に傾倒していく。そういう点から、この作品は、本稿の書の定義である「書とは文字を素材としてこれを視覚化したもの」と「字であることにはとらわれない造形」との間に位置づけられるものであろう。
- 15) 書学書道史学会編（2005）『日本・中国・朝鮮 書道史年表事典』萱原書房 p.296
- 16) 書学書道史学会編、上掲書 p.266
- 17) 書学書道史学会編、上掲書 p.308
- 18) 中国人留学生は中国語で記述した。後日、中国語母語話者の協力を得、日本語訳を行った。
- 19) ここでの「絵的な要素を含んだ文字」とは、あくまでも書を見た学生がそのように感じ取った文字であることを意味するに留まる。

**参考文献：**

- 東京書籍『書道Ⅰ』（平成18年検定）  
東京書籍『書道Ⅱ』（平成19年検定）  
東京書籍『書道Ⅲ』（平成16年検定）

**図版（資料1）：**

資料1の図版は、以下の図書より転載した。『書道Ⅰ～Ⅲ』は参考文献で挙げたものを指す。

- あ：『書道Ⅲ』 p.24      い：『書道Ⅱ』 p.22      う：『書道Ⅱ』 p.40      え：『書道Ⅲ』 p.27  
お：『書道Ⅱ』 p.41      か：『書道Ⅲ』 p.17      き：『書道Ⅲ』 p.22、23  
く：名児耶明監修（2009）『決定版日本書道史』芸術新聞社、p.52  
け：『書道Ⅲ』 p.19      こ：『書道Ⅲ』 p.25      さ：『書道Ⅲ』 p.28      し：『書道Ⅲ』 p.18

書作品を見る観点

資料1：日本と中国の古典作品

